

実在と信念

ロックとバークリ、パースとジェイムズ

戸田 剛 文

アイルランドの哲学者バークリは、いわゆる観念論という主張をしたことで知られている。もともと、彼の主張が観念論かどうかをめぐっては、二〇世紀に研究者のあいだで議論があった。現代でもバークリの定番である全集の編集者の一人であるルースは、バークリの立場を、直接実在論的に解釈し、観念論よりもむしろ非物質主義という名称を選ぶことを好んだ。かつては、私も、バークリの観念論的な側面よりも、むしろ常識擁護の立場とも言える。直接実在論的な側面を、評価しようとした一人だった。だが、今では、私の立場はその当時とはやや異なっている。解釈それ自体が異なっているということではなく、むしろ評価すべきポイントが変わってきたというべきだろう。

本論文で、私は、バークリの主張の詳細な文献学的解釈を行うのではなく、バークリ哲学が持つ魅力はやはり観念論的な側面にあることを改めて論じることにする。しかし、その

一方で、やはりバークリ流の観念論には大きな問題を抱えていることは否定できない。バークリの観念論は、ロッキ的な世界観を巧みに利用することで成り立っているが、そのことが結果的にバークリの観念論を問題あるものとしていると考えられる。ただし問題があると言いはしたが、バークリ自身にとってそれは問題のあるものではなかったということは付け加えておいてもいいかもしれない。

バークリ哲学の魅力がその観念論にあるということを論じるうえで、私は、アメリカの古典的プラグマティストであるパースとジェイムズの関係をおりませつつ論じていきたい。実在と知識の問題をめぐる両者の関係は、私の考えではロックとバークリの関係と似ている。しかし、もちろんバークリとジェイムズは、世界観に関わる重要な点で異なっている。そして、両者を分かťその相違点こそが、バークリの哲学が問題があるように見せると同時に、魅力的なものにも見

せるのである。

1. 観念論と科学

バークリは、ボイル＝ロック的な世界観において世界の实在性を担保する物質の存在を否定した。ロックは、そのような實在的な世界が「精神的なものをのぞいては」非常に小さな粒子からなると考えている。そして、それら物質がわれわれの身体に作用した結果が観念としてわれわれの心の中に生じるのである。たとえば私の目の前にあるリングは、赤い色をし、甘い香りを放ち、ひんやりとした固い手触りと、噛むと甘い味が口の中に広がる。これらの質的感覚は、心の中の観念であるが、りんごそれ自体がもっているものではない。だから、りんごそれ自体といっても、そのりんごは、さきほど私が述べた私の目の前にあるりんごではない。そのりんごもまた、私の心の中の観念である。しかし、實在物としてのりんごは、そのりんごの観念やさきほど列挙した質的な感覚を生み出す原因であり、極めて微細な粒子からなっているのである。そしてこの微細な粒子それ自体には、私たちが質的な感覚と呼ぶいかなるものをも持ち合わせてはいない。

バークリがこのような粒子の存在を否定する以上、彼はボイルやロックのような枠組みをそのまま引き受けることはできなくなることは言うまでもない。しかし、例えば目の前の諸物体が微細な粒子からできていることなどはその一つである。ルース流の解釈をここで用いるならば、物体を構成する粒子が、それ自体知覚可能なものであるならば、それらは存

在しうるのである。例えば、非常に高倍率の光学機器を用いて、りんごを観察した場合に、それが微細に粒子からできているとするならば、りんごを作る諸原子の存在は認められるだろう。しかし、知覚の生理学的現象についてはどうだろうか。ロックの観念説は、いわゆる知覚表象説と呼ばれるものであり、そしてそれこそが、近代においては懐疑論を生み出すと考えられ、二〇世紀においても知覚のヴェール説、あるいは二世界論などと呼ばれる哲学的問題を生み出した構図である。そしてそれがなぜさまざまに論じられてきたのかということには、重要な理由がある。それは、その構図が、大枠についていえば、科学的に正しい考えだと認められているからだ。質的な感覚から構成される現象が心の中にあるかどうかということを深く言及せずとも、「私たちが見る色は、光が私たちの網膜に刺激を与え、それが脳に伝えられ、いくつかの段階を経た後に生じるのである」という説明を否定する人は多くはないだろう。だからこそ、そのような質的な現象である色の原因には、色という概念は適用できなくなるのである。

ということは、原子でできた實在物としてのりんご及び、それが私たちの網膜や視神経をはじめとする身体に作用する一連の知覚の生理学的過程と、私たちが視野で捉えるりんごの関係をわれわれはどのように捉えればいいのかのだろうか。ロック的な立場では、前者は後者の原因となっている。しかし、バークリ哲学においては、この両者を因果関係として捉えることはできない。さらにはロック的な立場は、当時の自

然科学の成果を基盤としている。となると、バークリはやはり反科学主義的ということになるのだろうか。

これに対する私の回答は、確かにこのような構図を、バークリは完全には受け入れることはできないだろうが、若干の修正を加えることによって自らの非物質主義と両立させることができるというものである(2)。バークリは、両者の関係を、因果関係ではなく、対応関係として関係づけることができるのである。

バークリの観念論は、このような仕方では、かなりの程度自然科学とも両立しうる。しかし、このようにバークリの観念論を当時の自然科学の説明を調停することは、バークリ哲学の消極的な弁護になりうるかもしれないが、積極的な擁護とはならないだろう。私が本論文で行いたいことはむしろ後者なのである。

再びロックに戻ろう。一次性質からなる物体でできた世界が実在するというロックの考えを、ロック自身が仮説であると言う(3)。つまり、「私たちの心の外に、実在する世界がある」という主張は、むしろ「私たちの心の外に、実在する世界があると仮定しよう」という主張であるというわけである。われわれが仮定するものの存在は、われわれがそのように仮定するという行為に依存しており、そのように考えるならば、ある意味でそれは「心の中に」近い存在であるように思える。バークリは、次のように言うこともできるわけである。観念の原因となる実在物の世界もまた心の中の存在であると。つまり、ロック的な実在物の世界と心の中の観念の関係は、

実在と観念の関係ではなく、それ自体、観念と観念の関係に置き換えられるのではないだろうか。

この議論は、バークリのいわゆるマスター・アーギュメントと呼ばれる議論を応用したものである(4)。バークリは、『対話』でこの議論を展開している。そこでバークリの論敵であるハイラスは、木や家が誰からも知覚されずに存在していることを想像することは可能ではないかと言う。それに対して、バークリの代弁者であるフィロナスは、そういった木や家は想像されているという点で、心の中に存在するではないかと反論するのである(5)。

この議論を用いるならば、ロックの言う一次性質からなる実在物は、それが仮説として考えられていることによって、心の中にあると言えたのではないだろうか。

ただし、バークリは、そのような実在物として主張されているものを正当な観念として認めることはないだろう。というのも、バークリは、次のように主張しているからである。

さて、これらの根源的性質がほかの可感的性質と分け難く結び付けられており、そして思考の中でさえ、それらから抽象されることができないことが確かだとするならば、それら根源的性質が心の中にしか存在しないことは明らかに導かれるだろう。△中略▽私自身について言えば、延長し運動している物体の観念に、何らかの色やほかの可感的性質―それらは心の中にしか存在しないと認められているのだが―を与えることなしには、作り出すことは私の能力に

はないと明■に見て取ることができるのである。端的に言えば、あらゆるほかの性質から抽象された延長や形や運動を想うことなどできないのである(6)。

この議論は、バークリの有名な一次性質と二次性質の区別の否定に関する議論である。バークリのマスター・アーギュメントに関する議論も、この一次性質と二次性質に関する議論も、多くの批判がバークリに対してなされてきた議論である。確かに、バークリのように、観念を必ず具体的な心像でなければならぬとする立場には■難があるだろう。しかし、それをここで擁護することが(たとえできたとしても)することが本論文の目的ではない。むしろ私がこの論文で試みたいことは、バークリ哲学において私が示唆的だと考えるものを提示することである。

バークリは、いわゆる私たちが日常的に知覚し、存在すると考えている物体あるいは物質を否定しているわけではないと繰り返して言う。むしろ、そういった私たちが日常的に取り扱う諸物の存在を不確かなものにしてしまうのは、物質主義者であり、常識は、その点について彼に味方するだろうと考えている。サミュエル・ジョンソンが石を蹴っ飛ばしてみたり、深い親交のあったスイフトが彼を訪問したバークリに扉を通り抜けさせようとするのは、あまりにも単純な誤解だった。

ウィリアム・ジェイムズは、「バークリは外的世界を否定したのではなく、それを裏付けようとした(7)」と述べたが、

バークリは、日常的な物体だけではなく、ロックや科学者が扱う実在物としての物質がわれわれとどのような関係にあるのかを説明する潜在力を持っているのである。

それらの実在物は、私たちの思考から完全に独立したものではない。私たちがどのようなものであると考えるかということに依存しているのである。

2. パースとジェイムズ

パースの真理および実在に関する立場は、ある点で極めてロックに似ている。科学への強い信頼は両者に共通するものであり、それが実在観、真理観に影響を与えているのかもしれない。次のパースの言葉は、よく引用される言葉である。

科学のすべての追従者は、探求のプロセスが、十分に押し進めさえすれば、それが用いられる個々の問題にひとつの確実な解決を与えるだろうという心地よい希望によって活気づけられている。(中略) 視点をどのように変更しようとも、研究のために他の事実をどのようにに選択しようとも、心の自然の傾向によっても、人は定められた意見から逃れることはできない。この大きな希望が、真理と実在の概念の中に含まれている。探求するすべての人々に究極的に同意されるように定められた意見こそが、われわれが真理という言葉で意味するものであり、この意見の中に表されている対象が、実在なのである(8)。(CP5. 407)

ここでのパースの言葉は、われわれの探求がそこへと収束していく意見が真理であり、その真理は実在を表している。つまり、真理が実在を反映していると述べているように見える。また、パースが科学に強い敬意を払っていることは、いわゆる信念の固定についての彼の主張からも見て取ることができる。パースは、われわれがもつ信念が信念として固定されることを探求の特徴として論じているが、その信念の固定には、四つの方法があるという。それは、(一)固執の方法、(二)権威の方法、(三)ア・プリオリな方法、(四)科学の方法である。パースがこの中でわれわれが選ぶべき方法として考えるのは、科学の方法である。そして科学の方法をとるのに際して、パースによれば、われわれはまず実在の存在を仮定するのだという。

それは科学の方法である。その根本的な仮説を、より馴染み深い言葉で述べるならば次のようなものになる。実在物があり、その特徴は完全にそれらについての我々の意見から独立している。それらの実在物は、規則的な法則によってわれわれの感官に作用し、われわれの感覚は、われわれと対象の関係に応じて異なるだろうが、知覚の法則を利用するならば、われわれは推論によって事物が実在的に、そして真実にどのようなものであるかを推論によって確かめることができる。そして、いかなる人も、もしその人が十分な経験と、それについての十分に推論するならば、一つの正しい結論へと導かれるだろう(9)。

こういったパースの主張は、彼によるデカルト主義の批判と関係しているだろう。パースは、デカルトのように、全面的な懐疑を行うことを否定する(10)。われわれが疑うことができることは、意識に現れるほんの一部分であり、その背後には多くの疑いえないことが控えているのである。実在的な世界を彼が仮定するのは、そういった彼の考えが反映されていると思われる。さらにパースによれば、科学の方法は、他の方法と異なり、その方法をいくら推し進めたとしても、この実在仮説を反駁することはない。こういったパースの考えは、彼がリードを高く評価したことにも現れているだろう(11)。リードは、われわれが基本的に正しいと信じていて、そしてそれが誤っていることを示す証拠が見つかっておらず、われわれが世界について考える公理となるようなものを常識と呼んで、暫定的にはあつても正しいと考えるべきであると考えた。

いずれにせよ、われわれはロックとパースの間にある強い類似点を見いだすことができるだろう。しかし、パースの考えは、それゆえに批判されることにもなる。つまり、実在とわれわれの信念の一致を求める立場が呼び起こす批判である。例えば20世紀に最も影響力のあったプラグマティストの一人であるローティは、表象主義、つまりわれわれの知識や正しい信念が実在をなんらかの仕方で反映していると考える立場を批判し続けた。例えば同じく反表象主義の代表者であるデイヴィッドソンを援用しつつ、次のように述べている。

デイヴィッドソンのような哲学者は、パースやパトナムが実在や真理といった語の「絶対的」意味を見出そうとした謙虚な試みに対してさえ疑念を抱いた。なぜならパースは、ペインと彼のデカルト批判に同調しながら、依然として表象主義的概念に拘っていたし、パースが「探求するすべての人々が究極的には一致する運命にある意見が、われわれが真理という名で意味するところのものであり、この意見に表象された対象が実在である」と語るとき、彼は表象主義の概念を用いているからである(12)。

いずれ私は、この表象主義に対するローティの評価に触れることにしよう。しかし、ローティが同じ文章のこれ以外の箇所¹²で、しばしばパースとともにウィリアムズにロック的という形容詞をつけて説明していることをみても、パースをロックに近い立場として位置づけることに、それほど躊躇する必要はないだろう。

次にわれわれは、この論文最後のキーパーソンであるジェームズに目を向けてみよう。さきほど、その一端をすでにとりあげたが、ジェームズは、バークリについて次のように述べている。

バークリは、われわれが知っている世界を否定するどころか、それを確証したのだ。バークリが外的世界を非実在へと還元するすべてのもののの中で最も効果があると言って批

判したのは、外的世界の背後にある、それより深遠で実在的で、それを支持するために必要とされる、われわれによって接近できない物質的実体のスコラの思念である。彼が言うには、そのような実体を捨て去れ、あなたが理解でき、接近できる神があなたに直接的に可感的な世界を送り与えたということを信じよ。さすれば、あなたはそのような世界を確信し、彼の神聖なる權威によってそれを支持することができるだろう。「物質」についてのバークリの批判は、結果として絶対的にプラグマティズム的である(13)。

ジェームズは、バークリの物質否定論の一面をこのように高く(と言っていいと思われるが)評価している。超経験的なものではなく、経験的なものによって世界を説明しようとするジェームズは、バークリのいわゆる物質否定論を、物質の再定義として捉えたのであり、これはまさしくバークリが自らの哲学をそのように理解してほしいと思うものであるといえるだろう。

ところで、このようなジェームズの評価は、もちろんジェームズ自身の哲学によりそうものである。ジェームズは、バークリの哲学は、いわゆる二元論の克服につながるものであると考えており、それはジェームズ自身の試みでもある。

二元論を理解するより具体的な方法のための最初の楔は、ロックが「観念」という言葉を事物と思考を無差別に表すために用いたとき、そしてバークリが、常識が実在という

言葉で意味しているものは、哲学者が観念という言葉で意味しているものにほかならないといったときに形作られた。ロックもバークリも、彼らの正しさを考え抜いて完全な明晰さにもたらずことはできなかったが、私が擁護している概念は、彼らが最初に用いた「プラグマティックな」方法を一貫して遂行することではないように、私には思える(14)。

ここでわれわれは、いちおう簡単にではあるが、ジェイムズのその二元論の克服についてみてみよう。なぜここでジェイムズがロックとバークリに言及しているのであろうか。ロックが用いる「観念」は、われわれの心の中の存在物であり、それらは外界の表象であり、またときには情緒や感情などのわれわれの心の中に生じる心的な現象をも表すものである。心の中の外界の表象という点では、それはわれわれの外界の思考であるとも言えるだろうが、また一方では、観念はわれわれの知覚の対象であり、常識がいわゆる「もの」と呼ぶものでもある。この箇所でのジェイムズのロックへの言及はそれほど明確なものではないが、こういった観念の二面性のことをジェイムズはさきほどのような表現で言い表したのだと考えられる。バークリについての言及は、すでにわれわれがとりあげたひとつ前の箇所とほぼ同じ点であるといえるだろう。つまり、バークリが物質を再定義したということである。ジェイムズがバークリの再定義を評価するのは、彼の根本的経験論にかかわる。ジェイムズは『真理の意味』の中

で、根本的経験論を定義しているが、そのさい、次のように述べている。

要請というのは、哲学者たちのあいだで論議されるべき唯一の事物は、経験から導き出された用語で定義できるものでなければならぬというものである(15)。

このジェイムズの言葉をここで思い出すならば、バークリが物質を観念によって再定義するのは、まさに経験できるものによって物質を説明しようとしていることにほからないとジェイムズが考えることができるだろう。

ジェイムズの二元論の克服とは、例えば心的なものに物理的なものを還元するというような方法でも、また逆に物理的なものに心的なものを還元するというような方法でもなかった。彼がしようとしたのは、心を否定することでも物質を否定することでもなく、両方を認め、むしろどのようなにしてそういったものが生成されるのかを説明しようとするにすぎた。つまり、われわれの意識に現れる経験があるコンテクストによつては心的なものとして捉えられ、別のコンテクストによつては物質的なものとして捉えられる。この場合、心と物質、つまり絶対的に不連続的な存在として取り扱われてきた主観と客観は、連続的なものとして取り扱われることになり、超越論者が主張するような「決死の跳躍(16)」など必要ないことになる。

ここで、われわれはジェイムズの真理観に目を向けること

にしよう。本論文で、私はローティによるパースの評価に言及した。ローティは、パースにまだ表象主義の残滓があると考えていた。しかし、ジェイムズはどうだろうか。次のジェイムズの言葉を見てみることにしよう。

いかなる辞書を見てもわかるように、真理とはわれわれの観念のうちのある特性である。偽りが観念と実在との不一致を意味するように、真理は観念と実在との一致を意味する。プラグマティストと主知主義者は、ともに、この定義を当然のこととしてうけいれる(17)。

ジェイムズは、このような「真理を実在との一致」とする考えをしばしば繰り返す。この点については、ジェイムズはやはり真理の対応説を採用していると言いたくなる。しかしジェイムズは、彼以外の（あるいはプラグマティズム以外の）対応説者と彼自身がやはり異なることを強調している。両者の違いはまず「対応」がいかなるものであるのかということに関する違いである。そしてそれと同時に、実在をどのようなものとして捉えるのかという違いである。

3. ジェイムズの真理概念

ジェイムズによれば、観念と実在の一致とは、その観念を用いることによって、われわれをうまく導いてくれるということである。そしてその真なる観念とは、「われわれの生活を実在の仕組全体に適合させ、適応させるような観念」な

のである(P 102 [156])。ジェイムズがこのように述べるとき、彼の主張は、いわゆる一般的に言われる対応説よりも、むしろ整合説に近い。そのことをより明確にするために、彼が実在について言及している個所を見てみることにしよう。

実在とは、われわれ自身の知的な創意の集積物であり、われわれの前進しつつ実在を扱うときの「真理」へと向かう努力は、いつも、できるだけ古いものを変えることなく、新しい名詞と形容詞の中で活動しようとする努力なのである(18)。

ジェイムズの言う実在とは、決してわれわれの経験から独立した、あるいはそれと対立したものではない。われわれ多くの人間の経験が時代を超えて集積したものである。それにゆえに、実在とは経験の堆積物であっても、われわれ個々の人間がなにか思い通りにできるような主観的なものではない。われわれは多くのわれわれの思い通りにならない実在の中で、観念を道具としてうまく生きていくのである。そしてわれわれの観念がその実在の中でうまく機能するときに、その観念は実在と一致すると言われるのである。

もつともわれわれの経験の堆積物として実在をとらえるこの主張は、われわれにとってそれほどイメージしやすいものではない。少なくとも経験をとんなる主観的なものとして捉えることができないことは明らかだろう。しかし、この問題についてはこれ以上ここでは立ち入ることはできない。

私は、ジェイムズのこのような真理観を、パースのものと比較してみることにしよう。

パースの実在および真理観については、すでに多くの議論があるが、今はそこに深く立ち入ることなく、次のように彼の議論をまとめておくことにしよう⁽¹⁹⁾。パースは、まず実在の存在を仮定し、実在を反映するものだと考えた。そしてそれこそが科学の方法と呼ばれるものであった。そして、科学の方法は、ほかの信念を固定する方法と異なり、いくらその方法で探求が推し進められても、實在仮説を反駁することはない。パースの主張は、實在仮説は、われわれが基本的に仮定せざるをえない考えであり（常識主義）、また科学的探究はそれが推し進められれば推し進められるほどうまく機能するうえに、實在仮説を反駁することはないので、實在仮説の存在をむしろ確証すると考えてよい、というものに見える。このような主張は、實在というものをまず仮定するという点については、パースの強い確信が感じられる。また確かにパースの知識観は、ローティが指摘するように表象主義の面影はみられるが、「人々の意見の収束」をパースが強調していることを考えるならば、むしろ多くの人々の観念の整合性に力点が置かれているようにも思える⁽²⁰⁾。

一方、ジェイムズは、パースと同じく、実在の存在を仮定し（あるいは強く主張し）、観念の正しさは、観念と実在の一致にあると考えた。しかし、そこからさらに、「實在」とは何か、観念と実在との「一致」とは何かということに具体的な規定を与えようとしたのである。あるいは次のように

言っても良いかもしれない。ジェイムズは、それらの概念を再定義しようとしたのであると。すでに引用した箇所および『真理の意味』の別の箇所などの主張を見る限り、彼が念頭に置いているのは主知主義者であるが、ジェイムズの試みは、パースに対しても当てはまると言ってもよいだろう。

4. バークリとジェイムズ

前節までで、私はバークリとジェイムズのプログラムの類似性を確認した。本節では、それぞれのプログラムの問題点について考察したい。その際、まずバークリを取り上げることにしよう。そしてその後ジェイムズを取り上げたうえで、次節で再びバークリへと立ち返ることにしよう。

バークリの非物質主義における問題点として私がまず取り上げたいのは、バークリの非物質主義は、ジェイムズが評価したほど物質の単純な再定義になつてはいないということである。つまり、バークリは、いわゆる物質が、常識が思い描くようなわれわれの経験の対象にただけにはとどまらなかった。というのも、彼の哲学は、たんに常識の擁護のためになされたのではなく、むしろ彼の哲学に一致するような仕方方で常識を利用したと考えるほうが適切に思える側面があるからである。というのも、彼は、個々の知覚者の心の中に物体が存在するという主張が、いわゆる物体の公共性、客観性を損なうことを恐れ、それらを保証する絶対的な存在者として神を世界の中心に据えているからである。いやむしろ、そのような世界観を提示するために、バークリは観念論を提示

したと言ってもよいかもしれない。そしてもちろん、そのことがバークリ哲学の欠点だったと一方的に言うことはフェアではないだろし、そのようなことを私は言いたいのではない。彼の生きた時代と彼の状況を考えるならば、むしろそのような世界観を提示する方が、適切だったといつてよいと思う。しかし、そのような状況で生まれた哲学であるがゆえに、そのままの仕方で現代のわれわれが用いることはできないだろう。

プラグマティズムに共感する哲学者のひとりである私の考えでは、バークリがこの客観性と公共性を担保するために神の心を選んだことは問題である。バークリの観念論は、この客観性・公共性の点に関して、ロックの实在物を神に置き換えたものだと考えられるが、場合によってはロックの物そのものよりも問題であると思う。その点についてまず言及しよう。

私はすでに、バークリは、ロックの物そのものからなる实在の世界もまた心の中の存在であると主張するべきだったのではないかと述べた。同じことは、バークリの観念論についても言いたくなる。つまり、神が客観性と公共性を担保するものとしてわれわれの心の外に存在しているということも、またわれわれの心の中の存在物であると。しかし、そのような考えは、バークリは断固として拒否するだろう。というのも、それはまったくバークリの意に沿わない結末を生み出すからである。われわれの心の中に神がいるということは、明らかにバークリがしようとしたこと、つまり、神の存在を証

明し、しかもその神に神としてふさわしい能力を与えることに反するのである。われわれが神がいると考えているから神がいるならば、神の存在はバークリの意図に対してはるかに矮小化されてしまうのではないだろうか。神が持つとされる永遠性、絶対性、無限性などを考えると、バークリが確保しようとした神は、ロックの物そのものよりもはるかに絶対的な存在である。そうであるとするならば、バークリの实在の世界は、ジェイムズの言うようにたんにわれわれの物体観を経験の対象によって再解釈しただけではなく、むしろローティなどによって批判される表象主義に近いというように取れなくもない。

ここでジェイムズに■を向けることにしよう。すでに見たように、ジェイムズの実在は、われわれの経験の堆積物であり、それ自体が、われわれ人間の存在を超えて存在しているものではない。それらはこれまでわれわれが経験してきたものであり、今われわれが實在だと考えているものに、現在、そして未来のわれわれの経験が加えられていく存在である。現在以降の経験がそこに付け加えられていくということは、實在のあり方も変化していくことを示している。ジェイムズは、われわれの観念は、そして真理は、■いものなるべく温存しつつ、新しい経験ともに変化していくことを述べている。彼の主張は、クワインが科学理論の変化として述べているものときわめて類似している。ジェイムズは、「観念と實在の一致」として真理について述べていたが、その「一致」という言葉は、むしろローティが批判するような表象主義が

含意する対応説ではなく、むしろ整合説的であり、ホリズムと
 いったいいいようなものであろう⁽²¹⁾。しかし、ジェイムズに
 はもうひとつの考えがあつて、それはすでにその内容を紹介
 している根本的経験主義についてのものである。ジェイムズ
 は主観と客観の二元論を克服するために、それらが純粹経験
 から生じるという考えを論じている。これがどのようなもの
 であるのかは、すでに多くの議論があるし、いずれ別の機会
 でこの問題を詳細に検討したいと思うが、ある未分化で純粹
 な経験をわれわれの認識の出発点とする考えに私は懷疑的で
 ある。このような「純粹な」ものを存在の基礎におくことは、
 感覚与件論などの運命を思い出しても、多くの困難がつきま
 とう。そういったものは、探究の出発点としても、または分
 析の結果としても、はじめ想定されたほどうまく機能しない
 ものである⁽²²⁾。

5. バークリの観念論の可能性

前節においては、プラグマティストの観点から、両者の実
 在の捉え方を比較した。そしてそこではどちらかといえば、
 バークリの観念論がもつと考えられる問題点を指摘した。し
 かし、本論文の最初で、私はバークリの観念論の可能性につ
 いて論じることを明言している。この節ではその点について
 触れたい。

私は、バークリが、もしもロックの物そのものの世界が、
 つまり実在についての仮説が心の中のある存在であると主張した
 ならば、彼の議論はより魅力的なものになったと述べた。も

ちろん、たんにバークリがそのように主張すればよかったと
 いうことになるわけではない。というのも、バークリは、ロッ
 クのいうような物そのものという考え方は矛盾だと考えてい
 るため、そのために彼が行ったほかの、そしてそれに関係す
 る主張も修正されなければならない。また、バークリが神お
 よび神が維持していると考えている公共的で客観的な世界も、
 われわれの心の中のある存在であればよかったのにと、私は述べ
 た。もちろん、すでに述べた理由によつてこのような主張を
 彼に求めるわけにはいかない。しかも、それは彼の目的にそ
 もそも沿わないのであろう。

だから、私は全面的にバークリに賛成しているわけではな
 いが、それにもかかわらず彼の観念論は示唆に富むものであ
 ると考えている。それは、今さきほど私が問題であつたと述
 べた神の存在にかかわる点である。バークリは、一方で、主
 観的観念論と呼べるようなものを唱えつつ、その他方で、神
 という極めて客観的な存在を持ち出す。この二つの要素の混
 在が、彼の哲学の魅力でもあるのだ。

私が魅力だと考えているものを示すために、もう一度ロー
 テイの考えを取り上げよう。彼は、彼なりのさまざまな理由
 によつて表象主義を徹底的に批判する。しかし、表象主義者
 が主張する実在や、バークリの神のような存在は、私はある
 意味で重要な世界観の要素であると考えている。というのも、
 そのような実在の存在は、われわれがそこへ目指そうとする
 理念的な目標となりうるからである。そのようなものがある
 と考えるからこそ、われわれはよりよい真理あるいは知識と

いうものをめざし、われわれは成長していくのではないだろうか。重要なのは、そういった實在の存在が、まるで文字通りわれわれの信念から独立したものであると考えるべきではないということだ。私が言いたいことは、次のように言うことができる。

「われわれは、われわれの信念から独立した世界があるという信念をもっている。」

そして、繰り返しになるが、この私たちがもっている信念つまり「われわれの信念から独立した世界がある」という信念は、われわれの成長の源泉でもある。このように書けば、私がバークリが神の存在をわれわれの心の中の存在にしなかったことを残念に思っていることが理解していただけるのではないだろうか。ローティのような哲学者は、表象主義的な立場を攻撃するあまり、古典的プラグマティストたちがわれわれの世界の変化を重視したことを、さらに強調しすぎているように思われる。しかし変化が機能するのは、一方で変化しないものがあるからであろう。それらが併存するひとつのあり方を、バークリの観念は示しているように思えるのである。

6. 結びとして

私は、前節の最後で、「われわれは、われわれの信念から独立した世界があるという信念をもっている。」という言葉を書いた。私は、この文が、世界に対してわれわれが意識す

べきものを表していると考えているが、これがどのようなものであるのかという、本来さらに説明するべきであることをほとんど行っていない。これをどのようなものとして考えるのかということを、今後の課題としたい。ただこの文は、信念の内容とその信念自体のどちらかにより比重をおくべきだと考えるべきではない。これらはどちらも等しく扱われるべきものであるということだけは、ここで述べておくことにしよう。

註

- (1) 戸田剛文『バークリー観念論・科学・常識』、法政大学出版局、二〇〇七年。
- (2) この点については、拙著(二〇〇七)などでも論じている。
- (3) ロック自身は、やや少し控えめに、粒子仮説は、物質の性質について理解できる説明の中でも最も進んだものだと考えられる、と述べている。ここは、彼自身が直接的に粒子仮説を採用していることを明言しているわけではないが、そうであることはほぼ間違いない。Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Peter H. Niddich, ed., Oxford, Oxford University Press, 1975, IV. iii. 6.
- (4) Cf. Andre Gallois, "Berkeley's Master Argument," *The Philosophical Review*, vol. 83, 1974.
- (5) Berkeley, *Three Dialogues between Hylas and Philonous*, in *the Works of George Berkeley Bishop of Cloyne*, vol. 2, London, Thomas Nelson & Sons, 1949, p. 200. (邦訳『ハイラスとフィ

ロナスの三つの対話』戸田剛文（訳）、岩波文庫、二〇〇八年、八八―八九頁）。

- (9) Berkeley, *Principles of Human Knowledge, in the Works of George Berkeley Bishop of Cloyne*, vol. 2, London, Thomas Nelson & Sons, 1949, § 10.

- (10) William James, *Pragmatism, The Works of William James*, Frederick H. Burkhardt, Fredson Bowers, and Ignas K. Skrupskelis, Cambridge, Harvard University Press, 1975, p. 47. ウィリアム・ジェームズの著作は、このシリーズのものを引用している。

- (11) パースのテキストは、基本的に次のものを使用している。Collected *Charles Sanders Peirce* 8 vols, eds. Charles Hartshorne, Paul Weiss and A. Burk, 1931-60, Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press. 以下、タイトル (CP 巻数、パラグラフ) で示す。

- (6) *The Fixation of Belief* (CP5, 384).

- (10) *The Fixation of Belief* (CP5, 376).

- (11) たとえば、パースは『プラグマティシズムの問題点』で、リードやスコットランド常識学派を引き合いに出しつつ、それをさらに徹底するものとして自らを批判的常識主義と呼んでいる。またリードをプラグマティズムの先駆とみるものとして、Peter Baumann, "The Scottish Pragmatist?: The Dilemma of Common Sense and the Pragmatist Way Out," *Reid Studies* 2, 1999, pp. 47-57 などがある。

- (12) John P. Murphy, *Pragmatism: From Peirce to Davidson*, Westview Press, 1990, pp. 3-4. (高頭直樹（訳）『プラグマティズム入門 パースからデイヴィッドソンまで』、勁草書房、

2014年、六頁）この著書の序文は、ローティのものである。

- (13) William James, *Pragmatism*, Harvard University Press, 1975, p. 47.

- (14) William James, *Essays on Radical Empiricism, (The Works of William James)*, Harvard University Press, 1975. (邦訳)『根本的経験論』梶田啓三郎、加藤茂（訳）、白水社、二二頁。

- (15) William James, *The Meaning of Truth*, Cambridge, Harvard University Press, 1975, p. 6.

- (16) 邦訳、六四頁。

- (17) *Pragmatism*, p. 96.

- (18) *The Meaning of Truth*, p. 43.

- (19) 例えば、次のような文献を参照。Christopher Hookway, *Truth, Rationality and Pragmatism*, Oxford: Oxford University Press, 2002. Paul F. Foster, "The unity of peirce's theories of truth," *British Journal for the History of Philosophy* 4, 1996, pp. 119-147. Robert Almeder, "Peirce's Thirteen Theories of Truth," *Transactions of the Charles S. Peirce Society* Vol. 21, No. 1 (Winter, 1985), pp. 77-94

- (20) さらに、パトナムが強調するように、この考えは、ジェームズ自身にも見出される考えである。

- (21) ジェームズが、違いはありつつもクワインのホリズムを先取りしているという理解は、すでにしばしばなされており、ジェームズ研究においては一般的なものであると見て良い。

- (22) もちろん、このような一方的な断定は危険であろう。本文中でも書いたが、改めてこの問題はとりあげることでしょう。